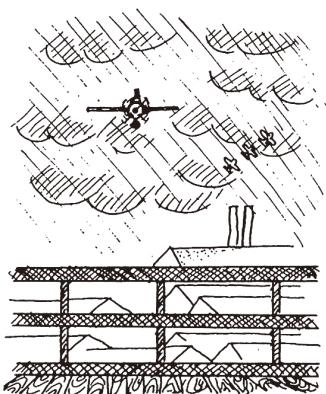


さあ逃げるぞ、ついてこい

木下志摩男



一九三七年（昭和十二年）七月七日に始まつた日中戦争は、一九四

一年（昭和十六年）十二月八日に火ぶたをきつた太平洋戦争の呼び水のようなものであつた。当時の私は、少年期から青年期にかけての成長過程にあつたが、その戦争の持つ意味も内容も、軍部・政府の言をそのまま受け入れる純真な学徒であつた。けれども、日中戦争から太平洋戦争へと、日本が国の歩む方向を決定づけてしばらくたつた頃からの物資の不足は、私の青春時代をきわめて不自由なものにしたことは事実である。

食料や衣料が年を追うごとに不足しはじめ、当時の日本人の生活は極度に貧しいものとなり、まことに生活しにくい世の中となつた。それに加えて、昭和二十年三月から、本格的な米軍の夜間焼夷弾空襲^{（しよういだんくうしゆう）}が始まつたのである。つまり、生活が貧しい上に、いつ空襲で殺されるかも知れない恐怖がつけ加わつてきたのである。

当時、私は名古屋市熱田区白鳥町に住んでいた。昭和二十年三月十九日の名古屋初の夜間空襲^{（よくじゆう）}

の時には、私の住居の周辺は、ずいぶん焼夷弾をこうむつて数多くの住居が焼けてしまった。死傷者、焼失家屋、罹災（災害をうけること）人口など、その損害はまことに大きく、一夜にしてあたり一面じごくと化してしまつたのである。それでも、私はまださほどの恐怖も生命の危険も感じてはいなかつた。というのは、私の家は空襲にもかかわらず焼け残つたのである。本当に空襲の恐ろしさを実感するのは、もうすこし後のことになる。

この頃、ラジオはどんな番組を放送していても、その途中「ジー」とブザーを鳴らし、「東海軍管区情報、敵の編隊は南方洋上から…」とか「東海軍管区情報、敵機數機、目標御前崎に向かって…」と流していた。要するに、敵機が日本内地を空襲にくるぞという情報である。この「ジー」のブザーの音はまことにぶきみで、いやだつた。それが真昼であろうと夜中であろうと、とにかく空襲に対応する姿勢をとらなければならない。特に夜中はいやだつた。ブザーが鳴ることによつて、安らかな眠りを妨害される。しかも、いつ自分の家を焼かれるかわからないのである。このようにして、戦争中の日々は過ぎていき、一九四五年（昭和二十年）五月十七日を迎えた。その日何時ごろ、あのいやなブザーが鳴つたのか、私の記憶にはない。

「さあ、またBが来たぞ。みんな早く用意をしろ」

と、父が言う。Bとは、当時アメリカが誇る超大型爆撃機B29のことである。父のこの「用意しろ」とは、母と妹たちは逃げる用意、私と父とはできる限り敵の焼夷弾から家を守るということである。母や妹たちの逃げる場所は、前々から家族一同でうち合わせておいて、最悪の状態に

なった時、私と父もそこで落ち合つ手はらずになつていたのである。

母と妹たちはすぐ家を離れた。私と父とは、家の二階から夜の空を見上げながら、口には出さないが、「また今夜もわが家は焼け残るさ。」と思つていた。そして、ラジオから流れる情報を細心の注意を払つて聞いていた。

ところがである。当夜の情報ではまたまた名古屋を襲うことが確実であり、しかも敵機はわが家にとつて最悪の進路をとつてゐるようである。父は言つた。

「今夜はひよつとするとひよつとするぞ。」

その後、数時間して、わが家は父の言う通りとなつたのである。

当時、世間の人々はこんなことを話し合つていた。「まん前をながめて、静かに頭を上げていき、その方向に飛行機が見えなかつたら、まず爆弾も焼夷弾も自分の近くには落ちてこない。」ところが、何とその夜、私たちが自分の家から空をながめていると、探照灯（たんしょうとう夜間、遠くの方まで照うち、サーチ）の中に見える敵機が、それと正反対の頭の真上の方向に見えるではないか。私も父同様、「こいつはあぶないな。」と思つた。

しばらくすると、焼夷弾落下のいやな音が聞こえ始めた。実際は落下した瞬間の音よりも、落下していく途中の音（とちゅう）が数倍いやなのである。なぜならば、すでに落下した焼夷弾はどこに落ちたかわかるから、それに対処する態度がすぐにとれるのだが、落下中のものに対してもはどこに落ちてくるかもわからない、自分の頭の上に落ちてくるかもわからないという恐怖心を持つのである。

る。その落下中の音は何ともたとえようのない音である。しいて形容すれば、ザアーッとでもいおうか、ズーッとでもいおうか。とにかく、何ともいえないぶきみな音である。そして、落下時の音はズシンとでもいおうか、ズドンといおうか。とにかく、それらの音が入りまじつてわたしたちの身近で始まつたのである。

まもなく、それこそドッシーンというすごい音がしたかと思うと、わが家の二階の天井を破り、一階のたたみの上で一発の焼夷弾が燃えているではないか。それを見た私は、ぬれたむしろをさつとかけたところ、幸いにもその焼夷弾はすぐ消えたことを今でもおぼえている。ところが、二階から家の周囲を見ていた父は、

「もうだめだ。近所の人も逃げ始めた。さあ逃げるぞ、ついてこい。」

といって、家を離れようとした。私もすぐに父のあとを追つて家を出た。そのとたん、家の前に一筒の焼夷弾がメラメラと燃えているではないか。私は前後の状況も周囲の様子も考えず、とっさに足でふみ消そうとした。そのとたん、足はぬらりとして足の先からひざの下あたりまで一面の火ではないか。「こりやあたいへんだ、足が燃えてしまう。」すばやく防火用水の中へ燃えている足をつつこんだ。これまたさいわいに、火は消えてくれた。もうぐずぐずしている状況ではない。とにかく逃げなければ命はない。もうそのころには、風上だの風下だと考える余裕もなく、ただ火の勢いの弱い方へ弱い方へと逃げていった。その時にはもう父とは完全に離れ離れになり、猛火猛煙もうかもうえんの中をとにかく逃げたのである。

夜明けに近づいたころ、私は知らず知らずのうちに、家族でうち合わせてあつた集合場所へと歩を進めていた。その姿は、まことにしょんぼりとして力なく、実に疲れきったようすであつたにちがいない。その場所で、家族六人が無事な姿を見せ合うことができたことを、おたがいに喜び合つた。

母の持ち出した食料をわかち合つて食べた後、父と私はその場へ身体を横たえ、そのまま眠つた。その間、煙はもうもうと立ちこめ火はぶすぶすとくすぶり続けたと母は後で話してくれた。
しばらくして、父と私はわが家の安否（あんぴ）（ぶじかどうか）を確かめるために、焼けた家屋の間をぬい、焼けた道路を歩いて行つた。やはりわが家はなかつた。完全に焼けおちていた。白い灰と黒い灰がまざり合つて、いかにも焼けましたよといわんばかりのわが家の焼けあとを、父と二人でぼうぜんとながめていた。床下に穴を掘つて埋めておいた書籍（しょせき）はまつ白な灰に、二台の自転車はぐにやぐにやの鉄くずに、その他の家具もまつたくあとかたもなく燃えていた。

このときを境に、名古屋の夜間空襲はなくなつた。おそらく、アメリカ軍はもうこれ以上空襲の必要はない、もう焼くところはないと思ったのではなかろうか。戦争中父母は、「ああ、あのとき焼け残つていたらなあー。」
と、よくつぶやいていたものである。

その父も、母も、今は亡い。